



2018年3月28日放送

頻用処方解説 麻黄附子細辛湯

鹿児島大学病院 漢方診療センター 沖 利通

主な効能

麻黄附子細辛湯はその名の通り、麻黄・附子・細辛の3つの生薬からなる漢方薬です。麻黄附子細辛湯は高齢者や虚弱者といった、虚証で寒証の感冒の初期に効果があります。最近では、気管支炎・アレルギー性鼻炎などの呼吸器疾患や疼痛管理にも広く使われるようになりました。

処方の出典

出典は『傷寒論』少陰病篇で、「少陰病、始め之を得て反って發熱し、脈沈の者は麻黄細辛附子湯之を主る。」と記されています。「陰」の病位である少陰病では通常發熱がみられません。しかし、この病位で發熱し脈が沈であるものは麻黄附子細辛湯を処方するとよいという意味になります。

処方名の由来

麻黄附子細辛湯は、麻黄・附子・細辛の3つの生薬からなる漢方薬で、その名の由来にもなっています。

生薬構成の漢方的解説

以下の3つの生薬から構成されます。

麻黄 4.0g＝解熱・発汗・抗炎症・抗菌作用・鎮痛・鎮咳・気管支拡張作用・組織の中のバランスを改善する利尿作用があります。

附子 3.0g＝発汗・鎮痛・心収縮力増強作用・利尿作用。

細辛 1.0g=抗アレルギー作用・鎮咳・解熱作用。

麻黄附子細辛湯は温性の生薬から構成されており、寒気を感じる人に適し、体を温め発汗させるため、発熱に対しても効果を発揮します。利水作用は水溶性鼻汁の改善に、麻黄と附子は抗炎症作用や抗アレルギー作用をもち、附子の鎮痛作用は頭痛や関節痛にも効果があります。

もう少し、詳しくみると、

麻黄=帰経が肺・膀胱で、辛温解表薬。『神農本草経』に発汗、平喘（へいぜん）、利水作用の記載があります。

1. 肺気を宣発し、腠理を開き、風寒を発散する発汗解表薬で、外感風寒による悪寒発熱、頭痛、身体疼痛、鼻塞、無汗、脈浮緊などの症状がある表実証に用いられます。
2. 肺気を宣発し、風寒を発散して平喘するため、風寒外束、肺気が留まることによる喘咳（ぜんがい）証に用いられます。
3. 発汗利水し水腫を治すため、水腫と表証を兼ねるときにも用います。

注意：麻黄は発汗力が強いので、表虚自汗、陰虚盗汗、腎不納気による喘咳に対し禁忌。

附子=帰経が心、腎、脾で、散寒薬。『神農本草経』では回陽救逆、補火助陽、散寒止痛の作用を有するとの記載があります。附子は心陽を助けて脈を通暢（つうちょう：すらすら流れる）させ、腎陽を補い亡脱した元陽を回復させ、回陽救逆の要薬となります。

1. 腎、脾、心など各臓の陽気衰弱証すべてに適用でき、補火助陽の作用を有します。要するに全身の陽気を温めることができ、およそ陽虚証であればみな用いられます。
2. 附子は祛除寒湿、温経止痛の作用があり、寒湿偏盛による関節疼痛がひどい場合に適用できます。
3. 新陳代謝機能の極端に低下したものを改善し、利尿・強心の作用を有し、熱がなくても悪寒するもの、手足関節の痛みを訴えるものに用います。

細辛=帰経が肺、腎で、辛温解表薬。『神農本草経』では祛風（きよふう）、散寒止痛、温肺化飲、宣通鼻竅（せんつうびきょう：アレルギー性鼻炎のこと）の作用を有するとの記載があります。

1. 細辛は芳香が濃く、顕著な祛風、散寒、止痛作用があり、頭痛・歯痛・風湿による関節痛に用います。
2. 外感風寒表証に用います。その祛風、散寒止痛の作用を利用します。
3. 寒飲が肺に停滞することによる咳嗽、喘息、痰が稀薄で多いなどに用います。その温肺化飲の効能によって咳嗽と喘息を止めます。
4. 宣通鼻竅の作用があり、副鼻腔炎により起った鼻塞、鼻水が多いときに用います。このほか細辛は外用でき、口内炎を治療できます。

古医書における記載

中国の医書には、いずれも足の冷えを伴う気逆による頭痛と寒厥（かんけつ）があつて、

上焦に熱がある症状を呈します。そして、少陰病で下寒があり、上熱（上焦および体表の炎症）すなわち表証がある場合に用いるとの記載が多くあります。

劉純（りゅうじゅん）の『玉機微義』（ぎょつきびぎ、明代）には、「頭痛に、少陰経の経痛、三陰三陽の経、流行せずして極寒の冷え、気逆に寒厥をなす。」とあり、足冷えを伴う頭痛に用いています。

わが国の浅田宗伯（1815-1894）は、『勿誤藥室方函口訳』で少陰病の体表部の熱を解する方剤であるとし、また『傷寒論識』（しょうかんろんし）では「少陰温初の主方で、少陰表法の正治（せいち）をなす。」とも述べています。吉益東洞（1702-1773）は『薬徴』で、悪寒、寒気があって震えがあるような人に投与するとよいとも述べています。

麻黄の肺気の宣発による呼吸器症状の改善や解表と利尿作用、附子の全身（腎・心・脾）の温陽や温経による鎮痛や強心・利尿作用、細辛の祛風・散寒止痛による鎮痛、温肺化飲・宣通鼻竅による呼吸器症状の改善が期待でき、高齢者や虚弱者といった虚証で寒証の感冒の初期に効果のある方剤として、麻黄附子細辛湯は認識されてきました。

現代における用い方（領域ガイドラインの記載など）

かぜ症候群（感冒）・インフルエンザ・気管支炎・急性腎炎などの初期で、陽虚の表寒を呈するもの。クインケ浮腫・腎炎浮腫・関節リウマチ・神経痛・腰痛症・慢性気管支炎・アレルギー性鼻炎の発作期などで、寒証や痰湿を呈するものにも用いられるようになりました。

EBM（薬理作用、最新の学会発表など）

かぜ症候群＝本間らは、麻黄附子細辛湯と総合感冒薬それぞれ約 80 例の初期のかぜ患者に投与する RCT を行っています。症状改善率が麻黄附子細辛湯で 82%、総合感冒薬で 60%、発熱持続日数は 1.5 日、2.8 日と、麻黄附子細辛湯が総合漢方薬より有意に優れていたと報告しています。

インフルエンザ＝加地らの報告では、かぜ症候群と当初診断されのちにインフルエンザと診断された症例を後方視的に検討して、麻黄附子細辛湯の十分な効果を確認しています。

インフルエンザのマウスモデルで、高木らは麻黄附子細辛湯が感染早期に IgG や IgM の抗体産生を早める作用があることを報告し、東らは特に高齢マウスにおいて抗体産生促進作用が強まるとし、免疫系を介する麻黄附子細辛湯の薬理作用を示唆しています。

アレルギー性鼻炎＝通年性のアレルギー性鼻炎に対する鼻汁分泌抑制効果だけでなく、花粉症に対して花粉飛散前からの予防投与の有用性も報告されています。

モルモットモデルでは、抗原に対する鼻粘膜の反応性を低下させることや、マウスの肥満細胞からのヒスタミン遊離作用の抑制なども報告されています。

疼痛＝白藤らは帯状疱疹後神経痛の有用性を報告し、兵頭らは各種の慢性疼痛患者において虚証で 50 歳以上の症例に投与したところ、56%に有効であったと報告し、様々な疼痛を訴える疾患で麻黄附子細辛湯の有用性が報告されています。

山崎らは、動物実験で内在性痛覚抑制システムの1つである下行性のセロトニン系を介して鎮痛作用を発揮するとしています。

処方適用のポイント（自分の考えるポイント、名医の口訣など）

高齢者や虚弱者といった、虚証で寒証の感冒の初期に効果のある方剤として、麻黄附子細辛湯は認識されてきました。かぜ症候群の中でも、冷えがあり、特に「喉がチクチクする」症状がある場合に効果が高いと言われます。

また、本方は陽虚の感冒を治します。必ずしも典型的な症状を呈しないかぜ、葛根湯や香蘇散で却って不快症状を呈する感冒に試すとよいでしょう。また温表利水的作用があるので、風寒による神経痛や関節痛、アレルギー性鼻炎や寒冷蕁麻疹などにもよく奏効します。少陰病症(詠が沈で細く、舌淡自湿潤)と表証(発熱)とを共に具えます。

類方鑑別（関連処方を含む）

かぜ症候群の初期で、比較的体力の低下した人に対しての使い分けは、以下のようになります。

小青竜湯＝体力中程度で咳・喘鳴があるが、無気力、冷え、悪寒が著明でない場合に用います(寒痰の喘咳)。

真武湯＝体力の低下した人で、手足の冷え、悪寒、頭痛などは似ているが、心窩部振水音、下痢、めまいなどが顕著である場合に用います(腎陽虚水)。

桂枝湯＝比較的体力の低下した人で、頭痛、身体痛は似ているが、悪寒と発熱がありしばしば自然発汗を伴い、脈が浮いて弱い場合に用います。

呉茱萸湯＝裏寒。頭痛と嘔気が著明な場合に用います(寒飲上逆)。

麻黄附子細辛湯の使い方

主に虚弱者の外感病の初期に用います。少陰の直中とって、傷寒で陰証の症状を現して発病する者に用います。表証はあるが、発熱は少なく悪寒が強く詠は沈細です。陽虚の表寒に対する基本処方で、老人や虚弱者の風邪、初期に誤治で発汗しすぎた場合に用います(舌は淡泊、舌苔は自潤)。効能は悪寒、微熱、全身倦怠、低血圧で頭痛、めまいがあり、四肢に疼痛冷感あるものの感冒や気管支炎といわれ、のどがチクチクする場合に特によく効くとされています。